

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

<Educational Report> About the Recent School Absenteeism

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山, 雅宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1193

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



最近の不登校について

About the Recent School Absenteeism

杉山 雅宏

SUGIYAMA, Masahiro

1. 最近の不登校事情について

およそ20年前であれば、学校現場での相談といえ
ば不登校が中心であった。どこの学校でも教師が悩
み、頭を抱える問題が不登校であった。

しかし、こうした事情は、この20年で一変した。
最近の学校現場での相談は、発達障がい話題が多
くなっている。これは、不登校に対して様々な策が
講じられ、「保健室登校」「別室登校」「教育支援セン
ター（適応指導教室）」「フリースクール」など、様々
なルートが開通したことで、不登校としてカウント
される児童・生徒が少なくなったことも1つの要因
である。

では、不登校は解決したのだろうか。現場教師な
ら知っていることであるが、実際には、様々な形を
含めれば、教室に入れない子どもの数は決して減っ
てはいない。現場教師たちは、日々、不登校の子
どもたちに対して心を砕いている。

ただ、不登校の子どもたちはそもそも学校に来て
いないため、教室で暴れて授業妨害をする、他の児
童・生徒を傷つけるなどのトラブルを起こすことが
ないため、問題行動として上がることが少ない。た
だ、高等学校の場合は、単位取得のための欠
席日数のリミットが迫ると、退学するかどうかを巡
り、当該生徒のことが議題としてあがるため、注目
されることがある。しかし、その場合でも退学（ま
たは、転学）という判断が下されて学校を離れ、教
師の関心からは遠ざかる。学校からは離れても、そ
の後当該児童・生徒は自宅でのひきこもりとなり、

何ら解決されたわけではない。こうした不登校への
関心の薄れとでもいう現象が、最近の不登校問題に
とってもっとも重要な問題ではないだろうか。

不登校に対して様々な策が講じられるようになった
ことと、学校へ通うという事象に関して多様性が
認められるようになったことは、大きな進歩と言え
る。さらに、関心の薄れは、過度の干渉や圧迫を減
らしてくれるようにも思う。以前は、教師や保護者
が子どもを学校に行かせようと、引きずるように子
どもを連れていったりして、子どもの心に大きな傷
をつけるようなこともあった。口には出さないもの
の「怠けているだけ」という意識で不登校の子ども
を見ている教師も多くいたように感じる。

2. 問題として立ち上がりにくい不登校

前述のように、最近では不登校が問題としては立
ち上がりにくく、児童・生徒の側も、それに取り組
むということがかえって困難になっているようにも
感じる。これは決して悪いことではないと思う。私
は、不登校という現象をなくすべきものとしては考
えてはいない。むしろ、登校を強要しないことはあ
るべき姿であると考えている。

しかし、登校を強要しないことはよいことばかり
ではない。児童・生徒は気が向けば学校に来たり、
好きなことばかりしている。教師もそれが何となく
気になったり、正直言えば、不快になったりしなが
ら、日々が過ぎていく。どこかで気になりながらも、
目先の問題行動を呈する児童・生徒や保護者対応に

キーワード：つながり、人間関係、メンテナンス
Key words : connection, humanrelation, mainntenance

追われ、モヤモヤした気分のまま毎日を過ごしているという事態にもなりかねない。

不登校を呈する子どもたちも、なんとなく日々を過ごすことができる。心には深い葛藤を抱えていて、決して心が晴れているわけではないが、ほとんど逼迫感もなく、以前に不登校という現象に名付けられていた学校恐怖症というような恐怖の感覚を感じる子どもたちはほとんどいなくなっているようにも思う。このことは、不登校ということで悩むという状態から、逼迫感が減っているということだと言えるかもしれない。

人が自らの状態を変えるためには、悩むことが大切である。人はそう簡単には変わらない。「よくないところを変えよう」と一大決心しても、そう簡単には変わらない。「よくない自分」もまぎれもない自分だから、そう簡単にそれを放り投げたり、なくしたりはしないものだと私は思っている。それほど頑固な自分が変化するのは、すごく悩んだときにやっとおこるもののように思う。そうした意味でも、最近の不登校は、以前よりも難しくなっているかもしれない。長い時間かけていく必要があると思う。

3. 人間関係の変化

最近、児童・生徒をとりまく人間関係の質が変化しているように思う。少なくとも、かつてはスマホやパソコンもなく、電話も家にはかけなければならなかったため、電話をすればたいてい親がでたものだ。「こんにちは。〇〇さんはおられますか？代わってもらえますか？」などと、ドキドキしながら電話をかけるなどということは、今はほとんどない。

LINEでの交流が一般的になった最近では、学校のクラス単位より、このネットワークでつながったグループの方が、重要な意味をもっている。こうしたグループは、イツメン（いつものメンバー）でうまくやっていくことが、児童・生徒にとっての死活問題なのだ。クラスに誰がいるのかよく知らないという子どもたちもいて、「教室に入れない」のではなく、実はこのイツメンに入れないという場合も少なくないようである。さらに、以前と変わったことばかりではなく、以前とまったく変わらない部分もあり、そのことが子どもたちに大きなストレスを与え

ているようにも思う。つまり、子どもたちにとって、友人関係はとても大事なことであり、そこから外れることはとても辛いことなのである。このことは、今も昔も変わっていないと思う。

しかし、以前と比べ人間関係はイツメンのように密度を増してきて、そこでの気の遣い方は尋常ではない。入浴時までスマホを持ち込み、既読無視に悩み、日々フラフラな状態である。以前なら、直接会って話をすることで誤解も解けたり、気持ちも理解できたところを、会うことができない点、電子媒体を通してしている点で、推測が妄想となり自分を苦しめることがあるようにも思う。そのような意味で、最近の子どもたちは、以前よりもさらに人間関係のしがらみにとらわれ、そこでの対人関係スキルは、とても高度なものが要求されているように思うのである。

4. つながりの問題

最近の不登校について、もう一つの特徴として、つながりにくさの問題がある。これは複数の局面で見出すことができる。

(1) なぜ学校に行けないのかわからない

不登校を呈する子どもたちの様子が以前とは少し違っていると思う。たしかに、以前から「どうして学校に行けないのか」を問うたとしても、そのことに子どもたちは答えられなかった。しかし、少なくとも、不登校を自分の問題として本人たちも悩んでいたし、それを言葉にしようとしていた。

今はどうかといえば、自分の問題というよりも、外の要因がまず挙げられることが多いのではないだろうか。「教師の対応が悪い」「クラスでいじめられている」、さらに、自分ではコントロールできない(自分には責任のない)身体具合の悪さなどの要因である。もちろん、以前から小学校の子どもたちの場合、学校に行けなくなる要因は、「悩んでいるから」というよりも、「お腹の調子が悪いから」というものだったりする。しかし、今は中学や高校の子どもたちの語りでもこのような身体の不調が語られることが多いように思う。なぜ学校に行けないのか分りにくくて、つながらない所以である。

(2) 不登校状態にある子どもたちと学校へ行けないことを話そうとしてもつながらない

不登校を呈する子どもたちの中には、発達障がい疑われる子どもたちも多くいる。そうした子どもたちも、自分たちの抱える辛さを上手に伝えることができないようである。

発達障がいを疑われる子どもたちは、人間関係を築くことや集団の中でうまく立ち回ることが難しく、学校という集団生活の中で大きなストレスを抱えている。それでも、繰り返される日々の生活を変わりなく過ごそうと努力する傾向が強いので、簡単には不登校にならない。辛くても頑張って学校に行くのである。しかし、度重なる対人関係ストレス、そこから生じる怒り、被害的な感情、そして、繰り返されるいじめなどを体験すると、さすがに「もう嫌だ」ということになる。発達障がいの子どもたちが学校に行かなくなるのは、よほどのことが積み重なっているのだと見た方がよいと私は思っている。

こうした経験を経て不登校になっていると推測されても、当該の子どもになぜ学校に行けないのかを問うても、ほとんど答えは返ってこない。発達障がいを抱える子どもたちにとって、自分が学校に行けなくなった経験を語ることは、すなわち現在の自分の状態をつながりをもって語ることはとても難しいことだからである。

(3) 保護者ともつながりにくい

教師の立場からは、保護者とのつながりにくさが問題になっている。不登校を子どもが直面している問題として抱えるというよりは、教師や他の子どもたちから受ける被害として受け止め、闘っている保護者も多いからである。さらに、そもそも不登校の問題を抱えるだけの家庭力が乏しく、話し合うことが難しい家庭も増えているように思う。

したがって、教師が不登校のことで保護者と話し合おうとしても話し合いにならず、会うことさえ拒否されてしまうということも多いと思う。こうしたつながりにくさは、不登校に関わろうとするときに、大きな壁として立ちはだかってくる。

5. 不登校の捉え方

以上のように、不登校は関わるのがより困難になってきている。だからといって、当該の子どもたちや保護者が苦しんでいないというわけではない。表面上は悩んでいるという状態を示していないかもしれないが、どこかで辛くてたまらないという思いをしているように私は考えている。時折、原因不明の発熱など起こす子どももいる。これは、車にたとえるなら、クラッチが外れているせいで、アクセルが踏まれ、エンジンそのものは唸りをあげて加熱して、そのせいで発熱しているため前に進まないイメージと一致するのではないだろうか。

実際、不登校がなぜ起こり、どうすればいいのかということは、そう簡単には解明できない。原因を明らかにし、それを解消しようという発想は、ものの修理のときの対応の仕方であり、人間に当てはめようとしてもそれは上手くいかないことは初めにも述べた通りである。それでは、どのように考えればよいのだろうか。

(1) 力のある子が不登校になる

そもそも力をもたない子ども、環境が許さない子どもは不登校にすならない。きょうだいの中で一人が不登校になると、その子が弱い子であると思う場合が多いかもしれない。しかし、実際は、きょうだいの中で最も力をもった子どもが不登校という状態を呈するもの私とは考える。不登校は家庭や自分を変革しようとする仕事だからである。家庭や自分という、動かすにはとても厄介なものに立ち向かい、変えていこうとする力をもった子どもが不登校になると私は考えている。

「不登校になる子は、寝ているばかりで、逃避している弱い子ども。他の子どものようにどうして普通に生きられないのか」などと疑問を呈する人も多い。たしかに、普通という側面から見れば、流れに乗ることができない弱さがあるかもしれない。しかし、普通の子どもがエスカレーターに乗って進ところ、階段を登っているわけだから、そこにはやはり強さがあるといえるのではないだろうか。もちろん、自らが主体的にその人生を選択しているというわけではなく、本人の自覚としては、「なぜこんなことに

なっているのか」が分からないと思う。

臨床活動をしていると、「高校のときに不登校になっておけばよかった。そうすれば、今になってこんなに苦しまなかった。当時は、学校に行くものだと思い、無理をしていた」「私にはひきこまれるような場所がなかった。家も自分の部屋もそのような場所になりえなかった」など、不登校について意外な語りを聞くことができる。

不登校を経験した人が、その当手を振り返り、不登校の原因を明らかにしたり、当時の様子を詳細に語ったりすることはほとんどない。当時は、霧に包まれたようで、悪い出来事ともいえず、そうかといって、よい出来事でもない、自分に起こった歴史という程度の認識なのではないだろうか。

不登校になる多くの子どもが、身体症状を呈する。これはよいサインであると私は考えている。身体症状を呈する子どもは、小さいころ病気になった際、親が面倒をみてくれたというよい体験をもっている子どもだと私は思う。熱が出たら親が心配してくれて、関わってくれたという体験があると、大人になってから何らかのストレスを抱えて辛くなったとき、身体症状を出し、小さいころのように家族や周囲の人が関心を示してくれるのを期待するのである。これが上手いけば、疾病利得として期待通りの反応を得て、少し元気になれるのである。

身体症状はサインでもあるから、自分も他者も、そのサインから何らかのものを受け取ることができ、自分の状態を変えることにつなげることも可能となる。

このような関わりを引き出ししたり、サインを示したりすることができたという意味で、身体症状を出せるということは強さでもあると思う。

本当の辛さとは、他者にまったく許容されず、居場所ももてず、関わってもらえない状態である。そのような人たちは、一見、身体症状も呈さず、ひきこもりにもならず、普通に暮らしているようにみえるが、心の奥底には深い孤独を抱えている。実は、学校現場で関心を寄せるべきは、症状を出さないがゆえに見過ごされがちで、そういった子どもたちであるような気がしてならない。

(2) よい子が不登校になる

人の気持ちが分かる子が不登校になるということである。人の気持ちが分かるから、相手の気持ちを先にくみとって行動をとる。「買ってよ、買ってよ」と店の前で駄々をこねる子どもは大丈夫だが、「買ってと言ったら、お母さん困るだろうな。ここで叫んだら、お母さんが恥かくだろうな」と思い、ぐっと我慢する子どもが不登校になるのである。

このようなよい子もそうでない子も気持ちはまったく同じである。しかし、よい子の場合、それを表現できないし、結局ものを買ってもらえない。何がもらえるかという、「○○ちゃんはいいい子だね」「○○ちゃんは手がかからないね」「素直でいい子だね」という言葉だけである。そうした親の承認を支えて生きていくのだが、あるときからそれができなくなるのである。要求はエスカレートするものである。「もっとよい子でなくてはダメだ」「もっとよい子にならないといけない」と思っているが、それがパーンと弾けたとき、もう何もできなくなってしまうのである。よい子はたちまち、本当の意味で辛い子どもになってしまう。

(3) 他人の痛みも自分の痛み

不登校になる子は、他人の痛みも自分の痛みと感ずる子どもである。自分もそういうところがあると感ずる人もいるかもしれないが、その程度がまったく違うのである。仮に、もしも自分たちの知らない誰かが交通事故にあって死んだとしても、当然泣くことはないだろう。もちろん、これが家族であれば別だ。他人事という言葉があるように、他人のことであれば泣かないのである。私たちはそういう冷たい存在なのだ。しかし、不登校になるような子どもたちは、そうした他人の痛みを自分の痛みのように感ずってしまう子どもが多いようだ。たとえば、クラスの中でAさんが教師に怒られているとする。それを見て身体がぎゅっと震え、不登校になる子がいるのだ。その子自身は何も怒られてはいなくても、他人のことなのに自分が怖くてたまらないのである。そういう子どもたちが不登校という症状を出すのである。

(4) 不登校についての考え方

以上のように、不登校の肯定的側面を話してきたが、現在不登校になっている子どもたち、あるいはその保護者、そして、その子に関わる教師たちにとって、不登校という状態は、決してよい状態とは言えない。何とかして学校に来させたい、教室に戻したいと思う人が多くて当然である。

それでは、不登校をどのように捉え、それにどう対応していくかということである。

私自身、不登校は病気や悪いことをしている状態であるとは考えていない。だから、治すものでも矯正するものでもない。不登校の子どもが問題をもった子で、これを何とかしなければいけないなどは考え方はしない。むしろ、こういう子どもたちはとても大事な仕事をしていると考えるようにしている。

大事な仕事をしているので、学校に行く余裕がないのである。たとえば、精神的に参っていてふらふらになっている母親を支えている小学校3年生の子どももいる。バラバラになりかけた家庭を立て直そうとしている小学校4年生の子どももいる。もちろん、こうした子どもたちは支えよう、立て直そうなどと考えて、そういうことをしているのではない。まして、家族立て直し計画のシナリオを描いているわけでもない。やっていることといえば、家でござろしていたり、1日中スマホにかじりついていたりするのである。しかし、こうした子どもたちの学校に行かないという存在が、家族や人を動かしていくのである。周囲の人にとっても、本人にとっても、それは辛い作業である。

私は、こうした作業（つまり、不登校になること）を推奨し褒めているわけではない。不登校という普通とは違った状態を生きることで、あまりにも辛いことだからである。よいとか悪いということではなく、不登校になっている子どもたちは、自分たちの意志を超えたものに動かされて仕事をしているのである。これを治すということは、回転している機械の歯車に手を突っ込むようなものである。

(5) 心のメンテナンス

仕事について、別の言い方をすると、心のメンテナンスをしている状態であると私は捉えている。

不登校の子どもたちは、今現在、これといったダメージを受けているというわけではない。ただ、このままいくと、将来の人生で大きな衝撃を受けたとき、心身ともに崩壊してしまいそうな危険がある場合、それを回避するために今のうちに心のメンテナンスという仕事をしているという考え方である。だから、このメンテナンス中は、外界とのコンタクトを一切遮断していると考えればよいのである。また、どこに将来のリスクが生じる可能性があるかにより、メンテナンスの期間は当然変わってくる。建物にたとえたと、表面に近いところであれば、そこを取り除き修復するということになるため、期間は当然短くなる。しかし、土台部分にひびがあると、かなりの時間を要する。こちらの方が、むしろ外から見れば何も問題は見つからないのだが、土台部分ということになると、まるで問題のない上層部分すべてをいったん取り壊すことが必要な場合も多い。そうなると、相当時間がかかる。身体のどこにも問題がない、元気そうに見え、むしろ恵まれている環境の中にいるのに、どうして長期間不登校という状況を続けているのか分からない。こうした理解しにくい不登校の場合は、上述のような土台からの工事的発想が腑に落ちるのではないかと思う。

もちろん、心のメンテナンスなど、しなくてもよければしないにこしたことはない。しかし、人生何があるかわからない。予期せぬ事態に遭遇することは絶対には言い切れない。だから、大事なことは、そうした事態に遭遇したときにそれを潜り抜けていける耐久力、あるいは乗り越えて生きていく復元力を備えていることだと思う。

不登校になる子どもたちは、自分がどこかに脆弱性を備えていることを知っているのである。そして、心のメンテナンスの必要性を認識するとき、不登校になるのではないだろうか。もちろん、頭で考えてり意識しているわけではない。どこかで感じてしまうのである。そして、心のメンテナンスという作業が終わると、自然に学校に行けるようになるのだと思う。だから、学校に行く、行かないというタイミングは、子ども自身が一番よく知っているのではないだろうかとは私は考えている。

6. 不登校への対応について

心のメンテナンスという見方をすれば、おのずと対応は見えてくるだろう。まず、無理やり学校に来させること、心のメンテナンスをストップさせることはあまり得策とはいえないだろう。

もちろん、最終的に学校に行けるようになることは待ち望まれることであるし、子ども自身もそれを願っている。しかし、それを焦るあまりメンテナンスを中途半端な状態で中断すると、何のためにメンテナンスを始めたのか、分からなくなる。逆に、将来のリスクを抱えて、かえって不安を積み残すことになる。

それでは、メンテナンス期間に周囲の人間は何をすればよいのだろうか。投稿刺激を与えない、放っておくのが一番よいというわけではない。

心のメンテナンスとはいえ、一人で抱え込むのは大変なことである。メンテナンスに携わるのは、本人だけでなく、家族や教師も可能な範囲で関わるべきだと思う。実際にどのように関わるか、これについては、メンテナンスの内容が一人ひとりすべて違うため、こうしなさいというマニュアルを示すことはできない。

しかし、定石のようなものは存在すると思う。考え方としては、子どもたち自身が問題児なのではなく、問題を知っている子どもと捉えることである。だから、基本的には子どもの力を信じるころからスタートすることが大切だと考える。しかし、だからといって、子どもたちが意識的に何をすればよいのか、分かっているわけではない。自分自身では、何に腹が立って暴力を振るっていたりしているのか分からないし、どうして昼夜逆転でゲームに依存する毎日から抜けられないのか分からないのである。

自分自身が何のために不登校になっているのか、その謎を共に考えるために、相談機関やスクールカウンセラーが存在する。だから、スクールカウンセラーなどは、不登校を治すことを助けるのではなく、子どもが抱える課題にともに取り組み、援助する仕事をしているのだと思う。不登校という心のメンテナンスを中断させるのではなく、それをむしろ進展させ、子どもや本人を取り巻く家族などの人生に活かしていくというイメージである。

教師もこのことが分かっているならば、学校に来た、来ない、クラスに入れた、入れなかったということ、一喜一憂することもなくなるのではないだろうか。極端な話、子どもが安心して不登校になれるよう手助けし、学校に来ないことで生じる様々な不利益、たとえば、学業の遅れ、クラブ活動の体験のできなさ、修学旅行などの思い出の作れなさなどをできる限り減らすような援助をすることができるように思う。もちろん、多くの教師はすでにこのことをしていると思うが、ただ、その動機があくまで学校に戻ることにいる場合があるようだ。そのため、クラブ活動や行事にだけ参加する子どもたちが肩身の狭い思いをし、教師の側もどこかで「これができるなら、なぜ学校に来ないのか」と子どもに対して否定的な気持ちを抱くことも少なくない。

同じような働きかけでも、メンテナンスを一刻も早く中断させようとするという動機に基づく働きかけに対しては、当該子どもたちはひどく敏感に反応し、抵抗するのではないだろうか。

メンテナンスを中断させるという動機ではなく、子どもへの信頼に基づいた援助であれば、逆に何をしてもよいと思う。少なくとも当人への関心を持ち続けること、見守ることはとても大切なことであろう。

*筆者は、千葉県子どもと親のサポートセンターで開催された、「平成30年度教育相談コーディネーター養成研修」において、「不登校など心理的の必要な児童・生徒の理解、保護者との協働」と題する講演を行った。本稿は、そこでの講演原稿に大幅な加筆・修正を加えたものである。